風が運ぶモノ

空無アキラ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
風が運ぶモノ

【Ｎコード】
Ｎ１６８８Ｆ

【作者名】
空無アキラ

【あらすじ】
潮風が心地よい町、海夜（うみよ）町に引っ越してきた少年、倉敷準（くらしきじゅん）。準は三年前のこの町での忌々しい記憶を胸に一年という時間をこの町で過ごすことになる。大切なモノを見失った準は長い時間の中で何を手に入れるのだろうか。人を信じることができなくなったかわいそうな少年の一年を描く。

プロローグ（前書き）

恋ってまっすぐ突き進むだけじゃうまくいかないときもあります。何度も寄り道したり、迷ったりしながらも捜し求めれば本当の恋というものが見つかるのではないでしょうか。そんな気持ちを胸にこの小説を書きました。どうぞごらん下さい。

プロローグ

黒く焦げ付いた記憶。

昔の俺はとても純粋だった。

手を握れば体が硬直するくらい緊張した。

好きだと言われれば頬を紅く染めた。

あの時は自分でもバカだと思えるくらい真っ直ぐで、

世界がとても暖かく感じられた。

そうそれはもう昔の話。

今はもう蝕まれた穴だらけの葉っぱ同然である。

俺がもし変わったと言うなら、それはあの町のせいであろう。

潮風があまりにも心地よかったあの町。

そしてあれから三年、俺は高校生になり、もう一度あの町に戻ろうとしている。

心の奥に刻まれた深い傷跡をほじくりかえすような気分だ。

転勤する親父の事情とはいえ、とても不愉快このうえない。

必要以上に揺れているバスの揺れで体を揺すられながら、俺の目線は過ぎていく町並みを追っていく。

どれもこれも変わっていない。

視界の隅を白い影がよぎる。

アクセントに黒い長髪が風でなびいていた。

あの影、嫉妬したくなるような白と黒の忌々しい調和。

通り過ぎる一瞬、『それ』と俺は目が合う。

その瞬間がまるで走馬灯のように脳裏に焼きつく。

覚えているに決まっている。

全ての終わりと始まりはあの少女によるものなのだから。

俺はもう一度、忘れないように、バスに同乗している乗客に聞こえないくらいに小さい声で、一語一語を確認するために呟いた。

白、凪、玲、奈。（しろなぎれいな）

長い一年になりそうだ。

春を迎える温かい風が首筋を通り過ぎる。

あの暗い記憶の底でのさばっている町に降りたつまであと数分。

自分自身を言い聞かせるように俺は心の中で今まで一年間ずっと胸においてきた言葉を呟く。

信じるな、それは幻だから。

疑え、それが真実だ。

俺の心には未だに痛みと絶望が混じった黒い感情が満ちている。

憤怒、嫉妬、悲愴、殺意――――――、

自分でも吐き気がするくらい最低の感情。

でも俺にはそれしかなかった。

『あいつ』に心の全てを捧げ、そして全て否定されたのだから。

俺には恨むことしかできなかった。

ただもう一度俺があの頃の純粋な気持ちを少しでも取り戻せたなら、

また俺はあの暖かくて心地よかった居場所を求めよう。

そしてまた新しい恋をしよう。

プロローグ（後書き）

ご意見ご感想待ってます。

第一話：潮風薫る春に　一部（前書き）

恋とは求めあうモノ、愛とは受け入れあうモノ。友達が言っていたことですが、考えてみるととても奥が深いです。

第一話：潮風薫る春に　一部

バスから降りると一層の潮風が俺を迎え入れるように吹く。

荷物のつまった旅行用のカバンを背負う。

ずっと座っていたせいで下半身が痺れているのを我慢して一歩一歩を親父に渡された地図を頼りに目的地へと歩を進める。

地図には赤ペンで×印を打ってある位置は坂道を町の中の高所にある丘の近く。

途中の坂道は地獄の坂と呼ばれているくらい急でこの荷物を背負って歩けるのか心配だ。

俺がこれから向かう泊まり先は三年前の中学生の頃、夏休みに一度この町に訪れた時に泊まった場所だ。

観光地としても多少有名なこの場所で営まれている民宿、兼喫茶店の『シーホーム岸田』。

仕事の手伝いをする代わりに三食（夜食含む）の毎月お小遣い五千円という条件で住まわせてもらう約束である。

それにしても、この海夜町（うみよちょう）には無風な時はないのだろうか。

いつも微弱ながらも吹く潮風を感じながら俺はふとそう思う。

この町にはどうしてこうして風が止むことを俺は感じたことはない。

まあたった一ヶ月くらいしか住んだことないので、本当に風が止むときはないのかは未だわからないのだが。

時計を確認すると二十分くらい歩いたんだと実感する。

ちょうどあの地獄の坂を目の前に俺はため息をつく。

いくら気温が眠気を誘うような暖かい温度だとしても、今の俺には苦である。

体力には多少の自身はあるんだが、これは本当の地獄だ。

息を荒げながら急な坂を上る俺はそう思う。

これだけの難所なら迎えの一人や二人来てくれてもいいんじゃないか。

文句を心の奥で呟きながら俺はコンクリートを蹴る。

「お、重い」

ついには口に出してしまう始末。

こういうつらいときに弱音を吐いたら負けだとよく言うが、もう負けでいいとさえ思ってしまう情けない俺である。

ちょうど坂道の中間点である地蔵を通ると俺の体力はもう限界だった。

「ここで一休みするか」

時間的にはギリギリであるが、このまま道端で倒れるのだけは避けたい俺は地蔵の横に座り、荷物を置く。

地蔵の目を閉じた顔に時々落書きしたくなるのは俺だけだろうか。

隣の地蔵のざらざらした頭を撫でながら俺はそんな罰あたりなことを考えてみたりする。

行き所のない視線を上に上げると樹木から生えそろった枝から垣間見える日光が万華鏡のように照らしている。

ちょうど俺が通っている坂道は小さな山の一角でもあるため年代を感じさせる樹木もあちこちに見られる。

そろそろこの重い腰を上げないと遅刻しそうなので俺は地蔵の頭を支えに疲れきった体を立ち上がらせる。

「よし、行くか」

まだ疲れのとれない足の筋肉を使い、俺は地面を踏みしめながら坂道を再度歩き始めた。

意識朦朧に『シーホーム岸田』を掲げるペンションに到着すると、約束の時間ピッタリだった。

ペンションの前には見知らぬ人影が一つ。

それは俺の存在に気付くなり小走りで俺に走り寄ってきた。

『シーホーム岸田』の刺繍が施されたエプロンを着用しているところを見るとこのペンションの従業員だろう。

「もしかして、倉敷準様ですか？」

茶色を帯びた短い髪、幼い顔立ちの少女は俺にそう言った。

身長は俺より少し下くらいだ。

「ああ、そうだけど」

俺が答えるなり少女は俺に深くお辞儀をする。

「すみませんでした。本当はお迎えに上がろうとしたのですが、急なお客様の対応で忙しくて……」

「言い訳はいいから早く案内してくれると助かるんだけど」

俺の冷たい言葉に少女は体をビクつかせ、顔を俯かせる。

「す、すみませんでした。こちらです」

俺がこういう物言いしか出来ないのは、つまり三年前の出来事のせ

いでもある。

あれから俺は人を気遣うことを止めた。

時折、平和に生きるために仮面を被ることはあるが、それは本心じゃない。

俺は他人を絶対信用しない、それが本心である。

ゆえに俺は他人に優しい言葉遣いなどしない。

だからといって空気を読まないことはしないつもりだ。

学校などの大勢が過ごす場では当然いい子の仮面を被る。

それが俺である。

「荷物お持ちします」

「いい。自分で持つから」

やはり俺の言葉一つ一つに体を小動物のようにビクつかせる。

睨むというよりは俺の機嫌を伺うように、俺の顔をチラチラと振り返りながら俺の前を歩く。

それが気に入らなくて俺は言った。

「何か言いたいことがあるか？」

「いえ何も」

すぐさま視線を前に戻して少女は俺の部屋へと先導を続ける。

微妙な空気の中、ようやく部屋の前に辿り着く。

「こちらが鍵です。予備はないので大切にしてください」

差し出された部屋番号の書かれたキーホルダーが付いた鍵をひったくるように取る。

「言われなくてもそうする」

俺は突き放すように素早くドアを閉める。

ドアの向こうで遠ざかる足音を確認すると俺は荷物を窓際に投げ、靴を脱いで畳の上に乗る。

部屋は五畳半くらいの小さな部屋で、テレビと冷蔵庫付き。

押入れには寝るための布団一式。

一度泊まったこの場所にはやはり親近感を覚える。

「さて、まずは挨拶でもしにいくか」

汗臭くなったシャツを脱ぎ捨て、新しいシャツを羽織る。

これから一年も泊めてもらうんだし、挨拶くらいは社会の常識だ。

歩き続けてダルくなった足を言い聞かせるように動かす。

半開きになった窓から網戸越しに潮風が部屋に入り込む。

潮の香りが鼻を通り抜けていく。

懐かしさを感じてしまう自分を抑えるように俺は扉を乱暴に閉めた。

第一話：潮風薫る春に　一部（後書き）

ご意見ご感想お待ちしております。

第二話：潮風薫る春に　二部（前書き）

他人をいじめる人はいじめられた経験がある人である。同じように他人を嫌う人は嫌われた経験がある。人は表面上の事実しか把握できないためそれに気付かず，むやみやたらにそういう人を敬遠する。それがその人にとってどれだけの苦痛であるかも知らず。

第二話：潮風薫る春に　二部

「久しぶりだね。随分大きくなったじゃないか。ちょうど頼もしい男手が欲しかったんだよ」

俺が挨拶に来るなり嬉しそうに俺と握手を交わす大きな体格の男性、岸辺弥太郎さん。

「そうね。これだけ体格もガッチリしてるなら遠慮なく力仕事も任せられるわ」

その妻、岸辺美佐子さんも俺の体をベタベタと触りながらそう言う。

「あの、それで仕事は今日早速するんですか？」

「何を言っているんだい？　今日は準君の歓迎会やるんだから、準君はゆっくり休んでいてくれてかまわない」

「そうよ、いくらなんでも来て初日に仕事を頼むほど私たちは悪魔じゃないわよ」

弥太郎さんの言葉に念を押すように美佐子さんは言う。

俺としてもあの坂を上って足が棒になってるこんな状態で手伝いなどする気はなかったが、一応念のために尋ねたまでである。

「じゃあ部屋に戻ります」

「ああ、ゆっくり休んでおくんだよ。明日からはビシバシ仕事を頼

むつもりだから」

小学校の頃からスポーツが得意だった俺には少々の体力の自信くらいはあったが、やはり足、特に太もも辺りの疲労が激しかったのかまだ少し震えている足を引きずるように部屋へと戻る。

何度見ても質素だがこればかりは文句を言っていられない。

一度改装されたこのペンションの名残でたった一つの改装前の部屋がここである。

ここは見晴らしもよく、さきほどの岸辺夫妻の人の良さから泊まり客は毎日出入りを繰り返している。

満員になることもしばしばなので俺は仕方なくこの部屋にいるしかないのだ。

「とりあえず、荷物の整理だけでもしとくか」

荷物か、そういやずっと疑問に思っていたのだが俺が荷造りした時よりも若干重くなっていたような気がする。

気のせいだろう、そう思ってカバンの中身を見てみると、

「――――――――これは何だ？」

ご開帳そうそうに身に覚えのない代物が目に飛び込んできた。

「貯金箱と理解していいんだよな？」

傍から見るとそれは堅固な金庫にしか見えない。
文字の刻まれたダイヤル、どこにあるのかわからない鍵を差し込むはずの鍵穴。
しかし、上には小さく小銭を入れるための穴が入っている。
これを満タンにするとしたら一体いくらかかるのか想像を絶する。
「とりあえず、押入れに入れとくか」
こんな使い道が泥棒の目をくらませるためのカモフラージュくらいにしか使えないような貯金箱、珍しいかもしれないがこれだけ狭い部屋に置いておくなど邪魔以外の何物でもない。
見た目通りの重さをしたそれを全身を強張らせながら部屋の押入れに叩き込む。
うちの両親は俺を何だと思っているんだろうか。
俺が律儀にあんな目標額が中古テレビ一台買えるように設定されている貯金箱など使うわけもない。
再びダンボールの前に腰を下ろし、再度中身をチェックする。
「さすがにもうないよな」
次に魔術の儀式のための呪具なぞ出てきた日には海の藻屑とさせてもらうつもりだった。

残念だが、本気で俺はそう思っていた。

「さっさと片付けて、いつもの日課しとこうかな」

いつもの日課、俺が『あの日』から毎日欠かさずに実行してきた行為。

別に人気のないところで呪いのわら人形を釘で打ちつけたりしているわけではない。

それに近いようでもあるが、俺から言わせれば全く違う。

バッグの奥から取り出される茶色の汚れが水玉模様のように付着した薄汚れの大学ノート。

表紙には番号が添付され、これまでの我が歴史を言わずと物語る。

『十三』。勿論これで十三冊目という意味である。

中を開くと、自分で言うのもなんだが整頓された文字の羅列が並び、内容は普通に何事なく過ごしてきた平穏な日々を綴ったもの、そう日記である。

毎日気がついたこと、むかついたこと――――――――嬉しかったことはない。

自分が得をしたことを書けばもしその後に嫌なことがあった時に過

去の幸せな自分を妬んでしまいそうだったからである。

今の俺には過去の自分さえ信用できないほどひねくれているらしい。

もしかしたらその内俺は今の自分さえ信用できなくなるかもしれない。

もしそうなれば、もう俺は生きている存在価値さえ失った廃人だ。

その先に待つのは地獄なんて言葉さえ釣り合わないくらい、暗く、冷たく、そして苦しい世界だ。

俺がこの町に引っ越してきたのは親父の転勤などというのは建前で、本当は断ろうと思えば断ることもできた。

親父は隣町の桜ヶ丘町で印刷業の仕事にあたり、母親は実家で祖父母と暮らしている。

親父が突発に「ちょうど三年前に世話になった海夜町の近くに転勤が決まったんだが、おまえももういい年だ。一人暮らししてみる気はないか？」

などと常人なら泥酔寸前になるような酒量を飲んでいる酒臭い親父の口からそう言われ、俺はそれに喰らいついた。

酒に酔うと思いついたことを何でも喋る親父のことだからどうせそれも酒に酔った勢いで言った言葉だろうが、一度約束してしまえばこっちのものだ。

このペンションのご主人である岸辺さんは親父と同級生の仲なので、

俺の引越しを快く承諾してくれた。

俺がこの町にどうしても引っ越したかった理由は語れば長いが、もし一言で表すとしたらそれは、

『薄汚れた過去の清算』とでも言うのか。

そのための第一歩はやはり『あいつ』に会わなくてはいけない。

あらかじめ岸辺さんから貰っておいたみかん箱の上でノートを開き、持ちなれた鉛筆の感触を味わうように強く握りしめる。

静まった畳から発せられる独特の匂いが充満する部屋に鉛筆が紙を擦る音だけが虚しく聞こえる。

腕の筋肉が疲れ始めたころ、いつものように考え込むことなく思ったままの事を書き連ね、

「よし、今日の日課終了」

本日のやるべき事を終え、これからどうしようか考える。

まだ時刻はゴールデンタイムを迎えたばかりで一眠りするには早過ぎる。

「とりあえず外の風にでもあたってくるか」

食前の腹馴らしに気分転換も兼ねて、一石二鳥である。

脱ぎ捨てられた赤色の線が入ったスニーカーをつま先を地面で小突

いて調えるように履く。

（念のため鍵を閉めておこう）

閉めた鍵をジーンズの小さいポケットに乱暴に突っ込み、廊下を見渡してみると一定の間隔を保って並ぶ客室がずらりと壮観に並ぶ。

どう見ても俺の部屋の扉とその扉の色合いから質感まで全て違う扉の間を通り抜け、玄関ロビーに辿り着く。

奥の方から騒がしい声が聞こえるのを考えると俺の歓迎会の準備であることはわかる。

気にも留めず俺は玄関の自動ドアを通り抜け、眩しいほどのネオンで照らされた都会と違いほとんど闇に包まれた外へと足を踏み入れる。

周辺には本当にペンション以外の明かりはなく、一メートル先も確かに視認できないほどである。

ペンションが見えなくなるほどに離れすぎず、だからと言って人目につかないところで休みたいと思う俺には一つの場所しか思いつかない。

（たしかここには……あれがあったな）

俺は体の向きを九十度左に回転させ、昔の記憶を辿りながらペンションの裏へと向かった。

第二話：潮風薫る春に　二部（後書き）

ご意見ご感想お待ちしています。

第三話：潮風薫る春に　三部（前書き）

見ているだけではわからいモノがある。どれだけ美しいモノだって、それは幻かもしれない。どれだけ醜いモノだって、それは埃を被った宝石かもしれない。それに気付かないのは罪ではない。それはただの彷徨い人。

第三話：潮風薫る春に　三部

ペンションの裏口には屋根修理などの時にしか使用されないハシゴがある。

屋根の上なら風をよく感じられるし、その上呼び出されても声がよく聞こえる距離であるので、一人になるにはうってつけの場所だ。

「あれ？　はしごが掛かってるな」

いつもなら折りたたまれて壁にもたれかかっているはずの茶色に錆びたハシゴが、空に向かって伸びていた。

ペンションの職員達は今忙しいはずなのでそれ以外の一般人かもしれない。

でも、ここの職員以外で俺のお気に入りの場所を知っている奴など『あいつ』しか思い当たらない。

「――――――――まさか、な……」

たぶん職員の誰かが仕舞うのを忘れたに違いない。

そう自分を説得するように心の中で自問自答しながらハシゴにゆっくり一段一段足をかけていく。

登りきる手前の場所でやはり俺は躊躇する。

『あいつ』がいるのを俺は恐れているのだ。

思い出す度に頭の奥がネジを捻じ込まれるような痛みともとれない違和感が襲う。

まるで本能が『あいつ』を恐れているような、そう錯覚してしまうほどの眩暈。

視界が揺らぐほどの眩暈で俺は一瞬バランスを崩す、

「うわっ！」

時が止まったような感覚、一瞬の出来事だった。

「危ねぇ」

間一髪、俺の腕はハシゴの傍を伸びていたパイプを掴んでいた。

「大丈夫ですか？」

つい最近聞いた気がする声が頭上から聞こえた。

見上げると俺が今日ここに来た時に出迎えた少女だった。

気のせいだろうか、眼が潤んでいるよう見えた。

「別に問題ない。それよりここで何してる？　他の職員は忙しそうにしてるってのに」

「私は、ちょっと考えごとを。準さんこそこんなところで何を？」

「俺は風に当たりに来ただけだ。というわけでどいてくれない？
そこに居られると登れないんだけど」

「あ、はい、すみません。気がつかなくって」

申し訳なさそうに頭を下げながら身を引く。

屋根の傾斜はそれほど高くないので危なくないが、足を滑らせて転がり落ちれば二階建てとはいえ大怪我は免れない。

それを考慮しながら俺は久しいお気に入りの場所に足を踏み入れる。

塩辛い微かな風が体の奥まで染みていくような、まるで傷口に消毒液で浸したガーゼを当てたような、そんな感じが今でもこの場所では変わらずに根を張っていた。

俺は芸術のセンスなどハッキリ言って皆無だが、ここから見える風景と、その風景が感じさせてくれる感触だけは言葉で言い表せないようなモノを俺は感じていた。

「ここの風気持ちいいですよね？」

「……まあな」

俺は海から顔を出す太陽が見られる絶好の位置に座る。

と言っても太陽など見えるわけもなく、見えるのは街の街路灯が生み出す煌びやかな文化の発展の象徴を示す風景。

俺が座る位置から近すぎず遠すぎずの絶妙の間隔を空けてその少女

は腰をおろす。

「好きなんですか？　この場所」

「……」

俺はそれに答えなかった。

答えたくなかったわけじゃない、ただ言葉が出なかった。

『好き』なんて薄い言葉で肯定したくはなかった。

もし肯定したらこの場所だけじゃない、自分の全てが否定されるようなそんな気がした。

こんなのただの被害妄想だろうが、俺にはそれでも肯定の言葉を口にしたくはなかった。

もしこの場所に対する俺の感情を表すとしたら、それは――――――、

「――――――――――――――大切」

『好き』に酷似しているようで俺の中では全く違う言葉。

「何か仰いましたか？」

「……別に」

『大切』とは自分と対象を同等と思い慕う感情、『好き』とはただ

求めるだけの感情。

そう俺の中では思っていた。

「それじゃあ、そろそろ戻ります。たぶんそろそろ呼ばれると思いますので、ご準備していてくださいね」

尻をはたく音とともに少女は俺に言った。

少女は俺が反応しないのを確認するとハシゴを降りていく音が遠のいていく。

別に準備することもないので、呼ばれるまでここで待つことにしよう。

両腕を頭の上に回して、汚れているのも気にせず体重を預ける。

夜空には星が薄っすらと砂の上に浮かぶ砂鉄のように輝いていた。

それはとても小さいくせに自慢げに金色の光を降らしている。

手をかざして比べてみても、俺の手のほうが大きい。

なのに俺はそれがとても羨ましかった。

そして神々しいその姿に、俺は嫉妬さえ覚えていたんだ。

俺の心の内で這い回る黒いモノ、それさえも寄せ付けないほどに高貴な星たち。

俺は星たちが体現するその『純粋』さに心惹かれているんだろう。
昔の自分を嫌いながらも、求めている俺がいる。
心中で生まれた矛盾に俺は嫌悪し、自分の髪を乱暴にむしり掻く。
こんな気持ちは昔の『あの事件』以来だ。
俺が最も恐れ、最も嫌い、最も大切なあの過去。
今でも思い出そうとすると頭痛が走るくらい、俺はあの日を嫌っている。
だからこそ、今日俺がここにいるのはその苦痛という名の足枷を外すためだ。
それだけのために俺は自ら一生足を踏み入れたくなかったこの町に来たんだ。
そう、それが俺の使命、俺のケジメ。
「さて、そろそろか」
下から聞こえる乱雑な声の行き交いが収まったのを見計らい、俺はこのままここで居眠りしないよう上半身を起こす。
そしてもう一度、夜空を首を上げて見上げる。
胸の奥で締め付けられるような痛みを感じたような気がした。

第三話：潮風薫る春に　三部（後書き）

ご意見ご感想お待ちしてます。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1688f/

風が運ぶモノ

2011年1月7日14時52分発行